

あ い な み や じ
愛名宮地遺跡出土

が と う
瓦塔

この瓦塔は愛名宮地遺跡の1号礎石建物址及び周辺から出土したもので、平安時代に作られたものです。

瓦塔とは、木造の五重塔を模倣して作られた土製の小塔で、中心に心柱を立て、基壇の上に軸、屋蓋、相輪を通して重ね、塔としていたものと思われます。主に奈良時代から平安時代にかけて作られ、関東、東海、北陸地方を中心とした地域に分布しています。

総点数 74 点が破片の状態で出土したのですが、欠失部分を補填して五重塔形に復元されています。復元高 136 センチメートル、最大幅 34.2 センチメートル。

瓦塔の胎土は酸化焼成による土師質で、色調は鈍い黄褐色から橙褐色のものが多くみられます。軒先及び九輪の一部には赤色顔料が付着しており、本来は彩色が施されていたものと思われます。瓦塔の製作技法には、8世紀代の瓦塔に多く見られる特徴と、9世紀代の瓦塔に見られる特徴が混在している状況が認められますが、全体的な様相から判断すると、製作時期は9世紀前半頃に位置付けるのが妥当と考えられます。

瓦塔が出土した1号礎石建物址は、土を突き固めた基壇の上に構築されており、南北1間、東西3間の建物が想定されています。遺構上面及び周辺からは瓦塔を始めとして、「寺」と書かれた墨書土器や鉄鉢形土器、獣足鋳型、灯明皿、鉄釘などの遺物が数多く出土していることから、仏堂などの仏教に係わる建物であったことが想定されています。

この瓦塔は、古代東国の集落内に仏教信仰が浸透していたことの実態を具体的に示すものとして、地域の歴史を考える上で貴重な文化財であるといえます。

